



VERITAS No.48 (2011.12.22)

“文学ジャンル”としての「忘れえぬ人々」

“文学ジャンル”としての「忘れえぬ人々」

濱下 昌宏

今さらの話題になるが、若年者の活字離れとか読書習慣の未熟さとか、要するに本に対する意識が薄れていることが、慨嘆であったり新時代到来という論議であったり、半ば諦めと半ば驚きを以て語られてきた。そうした議論はもはや新鮮味がないけれど、私としては、とにかく残念に思う。人間に生まれ読み書きを学んだ者が、あの読書の喜び・テキストの快楽を知らぬままにこの世から消えていくのは、あえて言えば猿の人生とどこが違うのか、それくらいに読書は人間として重要な営みであり経験であると思う。ただし注釈が必要である、字が読めることと本が読めることとは別である、と。さらに、巷の大型書店の店頭平積み本（＝いわゆるベストセラー）による読書体験と、感銘が読後に余韻として心に刻印される読書とは別である。このことは具体的な作家名を挙げて論ずる方が説明として理解されやすいかもしれない。しかしそうしたことは、読書を愛する者には多弁を要しないであろう。では、なぜ然るべき読書が非読書人の能力域外に陥ったのか？

ひとつには、活字の向こう側に現実が見えなくなっていることであろう。想像力の貧困化と言ってもよいし、読む者が現実直視に関してお粗末な体験しか得ていないために、読書に際しての知識や追体験・追思性が働かないのであろう。そのための解決策とも言えないが、私が提案したいのは、文学ないし本のジャンルとしての「忘れえぬ人々」である。

私の枕頭に置かれた本棚の一角には、「忘れえぬ人々」とでも要約できる本の数々が並んでいる。就寝時の読書のためであるが（たいていは寝るときは疲労困憊状態なので数分と読まずに昏睡状態に陥る・・・）、タイトルを見るだけでも一時の潤いになる。そこにあるのは、たとえば次のような書物である。国木田独歩「忘れえぬ人々」（明治31年）、石川啄木『一握の砂』（明治43年）所収「忘れがたき人々」、辰野隆『忘れ得ぬ人々』（講談社文芸文庫）（初出、昭和14、15年）、中野好夫『忘れえぬ日本人』（筑摩書房、1973）、矢代幸雄『忘れ得ぬ人びと』（岩波書店、1984、矢代幸雄美術論集Ⅰ。ただしタイトル名は矢代自身によらず）。——刊行年順に並べてみたが、私が読んだ順番もこの通りであったように思う。少なくとも最初に読後印象が強かったものは、冒頭に挙げた独歩のものである。

川崎市の溝の口にある多摩芸術学園が、教職に関して私の最初の出講先であった。その町内に亀屋という名の小さな旅館があって、玄関先の石碑には「国木田独歩『忘れえぬ人々』」といった銘が書かれていた。（現在その石碑は高津図書館前に移転。）明治31年に発表されたその掌編は、「明治の開化とは無縁に、昔ながらの生活を孤独に生きている人たち」（瀬沼茂樹）を描いたと評せられるが、主人公は小説家志望で流行作家への野望を抱いて旅をする男である。多摩川を越えて溝の口に宿を取り無愛想な宿の主人からの応対も済んで部屋に落ち着くと、同宿のひとは絵描きで、自分と同じように野心と夢をもつ男である。その男と話し始めるとやがて意気投合したかのように熱を帯びて会話をかわす。翌朝ふたりは別れ、そしてやがて作家志望の男は自分の体験を小説にして「忘れがたき人々」を発表するが、その中に件の画家は入らずに描かれたのは宿の主人であった、という物語である。独歩は短文の集成で作品をつくるが、それが作品に多くを語らぬ剛毅さの雰囲気を生んでいる。多摩芸術学園のあった溝の口の縁で、私は初めて独歩のその掌編を読むことになり、爾来、独歩の良さも私が愛でることになったが、ここでとりあげたい「忘れえぬ人々」というコンセプトも独歩の当の作品から得ているところが多い。そこで描かれる「忘れえぬ人々」の登場人物たちは、たまたま垣間見たに過ぎない人々、旅の途中で出会い少時間のふれあいで離れ、記憶にとどめた人々である。トーマス・マン『ヴェニスに死す』のなかの記述に、（主人公アッシェンバッハが描く人物像の特徴として）「疲労の極限にあっても働く人間、過重な任務に喘ぐ人、すでに精根をすりへらしている人、しかもなお毅然としている人、生れつき虚弱で、資力にも乏しく、意志の恍惚と賢明なやりくりによってすくなくとも暫しがほどは偉大な諸作用をわが身に奪い取るような、業績を旨とする・・・」（高橋義孝訳）、という表現があるのだが、そんな記述にもある程度該当する人々である。

それは奇人変人ではない。また、地位・名誉・肩書き・財産、等々の世俗的要素とは無縁の人々である。故人となられたがフランスを代表する日本研究者であったベルナール・フランクは、寺社のお札をコレクションしていたらしい。また最近、東日本大地震後、追い討ちをかけた原発事故と放射能汚染・被爆への警戒感などで多くの外国人が日本を脱出

していったが、そんな時にわざわざ日本に移住し帰化する決心をした外国人がいた。それはご存知アメリカ人の日本文学研究の第一人者であるドナルド・キーン氏であるが、彼はNHK テレビのある番組（「クローズアップ現代」、2011年6月29日放送）のなかで、その理由についてこう言っていた。高見順日記を読んでいた時、高見順が戦後直後の混乱していた駅にいた、駅は大変な人出で大混雑だったがそんな混乱した時代でも沢山の人が切符を買うために列を作って並んでいた。これを見た高見は、私はあの人たちと一緒に生き一緒に死んでゆきたい、と思ったらしい。キーン氏はそのように書かれた文章に非常な感銘を受けたという。キーン氏のもう一つの思い出は、以前奈良だったか京都だったか旅行していた時、雨に降られた、その時あるおばあさんがキーン氏に傘を貸してくれた。その時キーン氏は、「今この傘を借りても、あなたに返せないと思う」と言ったところ、そのおばあさんは「どうぞお持ち帰り下さい」と答えたという。番組のインタビューに答えて、そうしたことが私の帰化の理由かもしれませんが、とキーン氏は語っていた。キーン氏に託った「忘れえぬ人々」であろう。

私にも、我が忘れえぬ人々がいる。数十年前のことになるが、ヴェネチアで紹介されたあるイタリア人婦人はきれいな日本語を話し日本語で会話を交したが、彼女は『徒然草』をひとり研究されているという。一度も日本へ行ったこともなく、老いた母の介護と貧しさでその望みすら持っていないと語っていた。また、エディンバラ大哲学科のヘプバーン先生は、私の「シャフツベリの無関心性」論文とキッチュ論の英文要旨を読んで、あなたの関心は detachment にありますね、と、するどく見抜いてくれた。あるいは、学生時代の肉体労働のアルバイトの思い出になるが、私の郷里静岡のその小さな鉄工場で運転手をしていた方は絵を描き、カフカとドフトエフスキーを愛読していた。

しかしながら、ここで挙げたような私の忘れえぬ人々は、固有名を持ち、知的芸術的才能も発揮されて、独歩の「忘れえぬ人々」とはいくぶん異なる。むしろ、上記の書物のうち、独歩以外のものに該当する。つまり、石川啄木や辰野隆の本のように、親しくかつ長くふれ合い魂の交感しあう知友であったり、また、歴史上の立派な人物をとりあげた矢代幸雄や中野好夫のものに属するといつてよいであろう。矢代のものは、外国の学者・研究者との交友を語っていて、ウォーナー（ハーヴァード大学附属フォッグ美術館東洋部長、奈良京都を連合軍の爆撃をせぬように軍部に進言）とか児島喜久雄（自ら絵も描く美術史の大家で東北大、東大教授を勤め、大原美術館のコレクションの助言をした）とかといった人物の思い出やエピソードが興味深く読める。

たしかに、固有名で「忘れえぬ人々」を描くのは伝記である。英雄・豪傑・賢人・貴人・奇人・変人、女性ならば佳人、麗人、才女、等々、相当に傑出した人物が取り上げられるが、ときに私どもには雲の上の人々である。

ついでながら、「忘れられた人々」もある。これも私の書棚に置かれている本を挙げてみると、宮本常一『忘れられた日本人』（1960）（岩波文庫、ほか）、佐野眞一『新忘れられた日本人』毎日新聞社、2009、筒井功『新・忘れられた日本人 境界の人と土地』河出書房新社、2011、といったものがある。むろん、宮本常一の名著が感銘深い。「忘れえぬ人々」の趣旨とは別種になるが、我々に注目を促す貴重な書物群でありジャンルである。

さて、活字と本の向こう側に「現実」を読み込むことができれば、読書のおもしろさはいっそう増す。その「現実」は、まず「人々」のすがたとして印象づけられる。活字離れは、書物そのものの「現実離れ」にも問題があるのかもしれない。

神戸女学院からの夢と希望

特集に寄せて

濱下 昌宏 図書館長 総合文化学科教授

VERITAS 本号の特集に、私からも（図書館長として？）ひと言。神戸女学院大学の未来像、将来の夢を描いてみたい。TOEIC 何点以上の卒業生を、などといった“小さな”夢はここでは不要である。それにしても今日、本学のみならずすべての大学が互に受験生獲得の熾烈な競争（経営の危機、存続の危機）をこれからも半永久的に続けざるをえず、他方で文部科学省から国際的競争力と水準を有する大学を、研究を、と注文をつけられながら、学内の実態では授業と会議と学務と受験生集めで忙殺される教員・職員の心身消耗という窮状（高等教育の危機、高水準の研究維持の危機）——こんな現状で夢や希望を語るのはしょせん絵空事の作文になろう。では我々に求められているのは改革への実践への意志と行動のみか？ その場合でも掛け声ばかりが虚しく鳴り響いて“オオカミ少年”ならぬ大学人の仮面をかぶった“オオカミおじさん”の跋扈になりかねない。いうまでもなく、堅実な研究と学務のみが大学の声価を挙げていくという単純な真理は、じつは本学の昔の伝統を回顧すればかんたんに分かることなのだ。では、そうした真実の単純さを疎外している要因とは何か？ アトランダムに挙げてみよう。自分たちの教育（理念、方法、伝統）に対する自信の喪失。慢心と無知と怠慢から、社会や世界の高等教育の動向に対する顧慮の欠如。点数化・量化によってのみ判断基準を設ける質的判断力の衰退。世間や社会とはすなわち、露出度が明瞭なマス・メディアという短絡的理解と、広報宣伝効果に関してもマス・メディアに対する劣等感ともいえる屈服。学問研究とジャーナリズム主導の擬似研究との弁別

能力のなさ、等々。まだまだ枚挙可能である。概念的思索の衰退と記号的操作技巧によるレトリックの猖獗。集中心と緊張感の欠如、自己保身・責任回避という行動基準、等々。——しかしここまでくると、誇大妄想的な夢も浮かぶものかもしれない。非業の死を遂げた、かのキング牧師による名演説の一節をコピーさせていただくと、私には夢がある、いつの日か神戸女学院がかつての栄光を取り戻し、その名声を慕って日本全国のみならず、世界中から単身、岡田山に上ってくる有為で晴朗な女性たちがひとりふたりとあふれる日が来ることを。

「神戸女学院」というフィールドで語られる夢

森永 康子 心理・行動科学科教授

数年前に、総合文化学科の飯田祐子先生といっしょに、神戸女学院の学生を対象にして幸福観の調査を行ったことがある。それは、「あなたにとって幸福とは何だと思えますか」という質問に自由に答えてもらうというものだ。回答を集計した結果、幸福とは「家族や友人がいること」のように人間関係をあげた人がいちばん多かった。そして、ふしぎなことに「あなたにとっての幸福」を尋ねているのに、「家族や友人が幸せであること」という回答もいくつか見られた（注1）。

心理学の中には「文化心理学」という領域があり、人々の態度や行動が文化によってどのように異なるのかが研究されている。そこでは「幸福」についての比較研究も行われている。「あなたは幸せ（happy）ですか？」と尋ねられると、調査対象になったカナダやイギリスの人たちの約半分が「非常に幸せ」と答えたが、日本で「非常に幸せ」と答えた人は約3割だったという。さらに、アメリカやカナダでは「幸せ」は「楽しく、うれしく、喜ぶべきこと」なのだが、日本ではどうもそんなに素直な喜びにはならないらしい。しかし、日本が「幸せ」を喜びと感しないような、ひねくれている人たちの集まりかという、そういうわけでもないようだ。他人と違うことに幸せを感じるアメリカ人に対して、上でも述べたように日本では人間関係の中で幸せを感じる人が多いので、子どものように飛び上がって喜ぶという場面があまりないというだけだ。そして、何より、英語の「happy」は興奮するような幸せらしいが、日本語の「幸せ」はどちらかというとおだやかな落ち着いた状態を意味するという。先に紹介した我々の研究でも、「幸福とは心が満たされていること」という回答も見られた。

文化心理学の話はとてもおもしろいのだが、詳しくはその専門家に譲ることにしよう。今ではこの分野についての専門書もいくつか出版されているので、興味があれば「文化心理学」で検索してみるとよいだろう（注2）。こうした本を読むとわかるように、文化が違えばいろいろなことが違う。だからこそ、文「化」というのだろう。そして、文化の違いは何も海を越えなければわからないというわけではない。日本は意外と広く、地域が違えば文化も異なる。さらに、世代が違って文化は異なる。神戸女学院という小さな空間の中にも、さまざまな文化や価値観が入り込んでいる。教員である私にとっては、学生のみなさんの文化や価値観に触れること自体が興味深い異文化体験である。もちろん、時には興味深いのを乗り越えて、啞然とすることもあるのだが。

大学という場は、心理学者にとっては一つの研究現場（フィールド）かもしれない。フィールドで語られる何気ない会話やうわさ話。悩みや陰口。そして、何より夢や希望。それらは時に用意周到な計画だったり、かなう見込みのない壮大な夢であったりする。しかし、その語りをまとめれば、そのうちきっと本が書けるだろう。それは若い女性たちが自分たちの人生を模索する姿を描いた青春物語になるはずだ。将来が輝かしいものになるのかどうかは、誰も知らない。だからこそ、その物語はわくわくとときめくのだろう。そんな物語を読みたい人は、ぜひ私の書いた本をご購入いただきたい。ただ、本の完成はしばらく先になるのだが。

注1：この研究は、日本社会心理学会において発表した（森永康子・飯田祐子 2007 「二十歳の女性の幸福と不幸と現実」日本社会心理学会第48回大会）。

注2：この原稿を書いているときに読んでいたのは、増田貴彦氏と山岸俊男氏による『文化心理学』（培風館、2010年出版）。

アジアの優れた女子学生と共に学ぶ場に

寺嶋 正明 環境・バイオサイエンス学科教授

科学技術振興調整費「戦略的環境リーダー育成拠点形成」事業に採択された「地域からESDを推進する女性リーダー」という大学院の教育プログラムが2009年から始まりました。ESDとは「持続可能な発展のための教育(Education for Sustainable Development)」を意味し、将来の世代が豊かな社会を築き続けられるように、環境、経済、地域社会、人権問題など幅広い視点から総合的に考えて、現代が抱えるいろいろな問題に取り組み、教育を通じて、持続可能な発展を妨げる諸問題の解決をはかろうとするものです。この教育プログラムでは人間科学部での環境教育、地域リーダー養成プログラムでの実績を踏まえて作られました。この教育プログラムではアジア・アフリカ地域の女性大学院生が本学に1年間滞在し、本学の大学院生と一緒に学びます。アジアと日本における「環境汚染と修復の試み」、「地域に根差したESDの展開」を日本人教員による講義とアジアの各大学とをインターネットで結んだライブ講義によって、アジアと日本の状況を比較しながら学びます。また、西宮市で精力的にESDを推進するNPO法人LEAFでのインターンシップを通じて、「地域に根差した活動」を実践的に学びます。第一期生として、8名の大学院生を2010年に受け入れ、現在、第二期生の6名が学んでいます。

この教育プログラムに関わって以来、毎年インドネシア、マレーシア、フィリピンなど東南アジアの国々に出かけるようになり、そこで環境科学や環境教育に関心を持つ多くの女性教員や女性大学院生と出会いました。本学の教育プログラムに強い関心を寄せるアジアの学生たちは、しっかりとした教育を受けた向上心あふれる女性ばかりで、大きな感銘を受けました。また、彼女たちは合理的な知性に加えて、欧米とは違うアジア的な「しなやかさ」を合わせ持ち、日本女性の感性とも共通したものが感じられます。将来はアジア諸国が世界の政治・経済・文化に大きな影響を与えることが確実である今、私はアジア諸国で将来指導的役割を果たす女性大学院生と本学の学生と一緒に学び、考え、意見を戦わすことのできるような環境を作りたいと思っています。本学における教育のあり方を見つめなおし、英語の教育方法を磨き直し、しっかりと地についた専門教育を行って、神戸女学院大学が日本とアジアの優れた女性が共に学ぶ場となることを夢見ています。

神戸女学院大学で得た翼

田口 裕実子 総合文化学科4年生

知るとは、他人を特定の考え方に基づいて

一義的に解釈する事だ。

分かるとは、方法を限って相手を解釈する事だ。

愛するとは、解釈を限らない事だ。

私は、神戸女学院大学で

教えていただいている先生から、

この事を習いました。

(今回初めての試みとして、学生からの寄稿を募りました)

<本の花束 ーその8ー>

どんな図書館がいいですか

大西 裕子 図書館職員



みなさんは、最近「図書館が利用しやすくなったな」と感じられたことがありますか。

私たち図書館員は、今年に入ってから特に「使いやすく、何度も足を運びたくなる図書館に！」と、あらゆる所を見直しながら密かに改善しています。例えば、春から始まった読書会、ノートパソコンの利用時間を長くしたこと、などが挙げられます。

けれども、良くしていかないといけない点はまだまだありそうです。

みなさんにとって「足を運びたくなる図書館」ってどのような図書館ですか。

メール・投書・カウンター等、お気軽にご意見下さいね。

<研究室から>

ロッシーニの食事

高岡 素子 環境・バイオサイエンス学科教授

「モーツァルトが何を食べていたかわかりますか？」

対話という講義で学生さんから受けた質問です。環境・バイオの講義では受けたことがない質問に動揺しました。

対話という講義は、音楽学部の教員と他学科の教員が学生の前で語り合うというユニークな講義です。私とお話してくださった先生のご専門はバイオリンで、食に対する知識も豊富な上、いろんな食事を実践されていました。先生は音楽家として、私は科学者として、音楽家はどんなものを食べるべきかについて議論し、演奏や創作に忙しくても食事をおろそかにしてはいけないことや、日常の食生活が演奏内容に影響することなどについて議論しました。この対話から音楽と食べ物の関係は大変深いことを理解しました。

そういえば、音楽家にはグルメが多いということを知ったことがあります。

最も有名なのはオペラ「セビリアの理髪師」等を作曲したロッシーニです。彼は人気絶頂期に引退し、以後はそれまでに作曲した曲からの収入をもとに旅や美食に明け暮れたそうです。音楽家としてだけでなく、“食通”料理名人”として料理史にも名を残しました。

「ロッシーニと料理」(水谷彰良・透土社)という本には、ロッシーニが生み出したといわれる“ロッシーニ料理のレシピ”も多数掲載されているそうです。“なんとかのロッシーニ風”という名前のついた料理が多く残されています。

有名なのは、「トゥルヌドー・ロッシーニ」。牛のヒレ肉を脂身で包み、糸で縛って円筒形にしたものを分厚く輪切りにする。これをバターで焼き、鴨などのレバーで作ったパテを塗る。野菜を添えてその上からマディラ・ソースをかけたもの。

かなりハイカロリー。確かに写真で見るロッシーニは、メタボリック症候群と見受けられます。また自伝も残っており、食いしん坊なロッシーニは、きっと何を食べたかについて詳細に記載しているはずです。

モーツァルトが何を食べていたかについて記録されているかどうかは不明ですが、ロッシーニなら調べられる可能性が高いです。どんなものが好きだったのか？健康状態はどうだったのか？など、大変興味をそそられ、早く調べてみたい衝動に駆られます。しかし、これは老後の楽しみとして取っておこうと思います。今は目の前にある実験をしなければなりません。

いつの日か、静かな旧図書館の片隅でこっそり調べる日を楽しみにしています。

<特別寄稿>

「タルカット先生召天によせて」（2011年11月1日（火）大学礼拝奨励より）

井出 敦子 院長室職員



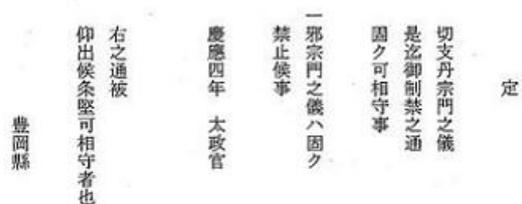
今日、11月1日は何の日でしょうか。1008年11月1日の『紫式部日記』に、『源氏物語』の存在を確認できる最も古い記述があるそうでした。2008年の「源氏物語千年紀」を記念して、11月1日を「古典の日」といたしましようという宣言が京都でなされているらしいのですが、ここ岡田山の神戸女学院においては、11月1日は私たちの学院の創業者であるタルカット先生(Miss Eliza Talcott)が天に召された日として記憶されています。先生が、1911年11月1日にお亡くなりになってから、今日でちょうど100年になります。

今日歌っていただいた讃美歌「われのかみにちかづかん」は、神戸組合教会最初の讃美歌（1874）の第1番で、学院創立当時に歌われていたものです。今も「主よ、みもとに」という題で歌い継がれています。



（神戸女学院図書館所蔵）

1936年5月22日にアメリカのコネチカット州でお生まれになった先生は、1872年に宣教師として海外伝道に赴く決心をなさいます。その当時の日本はと言いますと、ちょっとこの高札をご覧ください。読んでみましょう。



大政奉還後まもなく、元号が明治と改まる前の慶應4年に出されたこの太政官からのお達しにもその一端が現れているように、キリスト教禁令は続いていたのです。先生が当時約一ヶ月かかった日本への航海を始めたのは、この高札の撤去令が発令されて間もない1873年（明治6年）3月1日、先生36才の春のことでした。

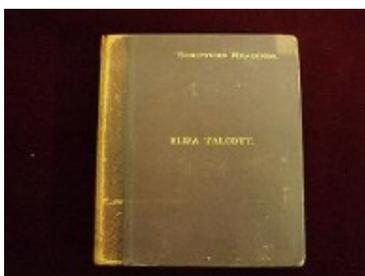
日本に到着したその年の秋には神戸に私塾を開かれ、その2年後、1875年10月12日には、神戸女学院の前身である寄宿学校を開設、以来、その後半生を日本各地の伝道と女子教育にお捧げになりました。

1910年（明治43年）の報告書（注1）に

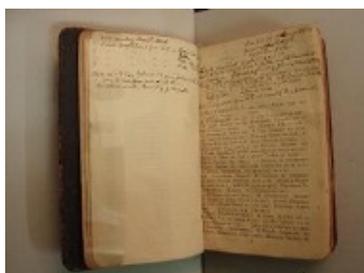
（自分が来日してから）わずか37年しか経っていないが、それは多くの素晴らしい変化を（この国に）もたらした。特に女性の教育の理想と社会的地位の変化ほど顕著なものはない、そしてそれは疑いもなく、主にキリスト教主義の女子校によってもたらされたものである

と、ご自身の教育への揺るぎのない手ごたえが記されています。

そうした先生の日常を知るてがかり、当時の初級英語や算数の本、讃美歌、聖書などが図書館に遺されています。



こちらは先生のお名前が刻印してある讃美歌、お亡くなりになってから製本したものかと思われます。



ローマ字の新約聖書、その余白に記された先生の書き込みが、学生たちと共に聖書を読もうとなさった先生の姿を今日に伝えています。



見開きのページには、この聖書が「タルカット記念文庫」(注2)におさめられた経緯が(手書きで)書き込まれています。(注3)

1911年(明治44年)、2月に宮崎へいらしてから、以前の活力が失われ、9月に夏の軽井沢から帰ってからはさらに疲労が重なっていらしたようです。10月16日には大

阪で開催された会合にご出席、19日まで教壇にお立ちになりましたが、20日に病の床につかれ、そして11月1日、故郷から遠く離れた神戸の地で75年の生涯を閉じられました。先生を看取られたバロウズ女史は追悼文“*In Memoriam*”の中で、彼女は「私の人生が私のメッセージ、私の遺言である」と言える人生を送ったと最大級の賛辞を贈っています。(注4) また、学院の『五十年史』には、「神と人ともに喜ばれた所の生涯」であったと記されています。



11月4日に学院で葬儀が営まれ、春日野墓地に埋葬されました。その墓碑銘は、先ほどお読みいただいたマタイによる福音書第25章21節(23節も同じ文章です)の真ん中(斜線部)を抜いたものになっています。(注5)

「忠実なよい僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。」

その後、神戸市の都市計画によって、1961年、再度山・修法ケ原(しおがはら)に改葬され今日にいたっています。墓碑は移転し、周辺は新たに整備されました。



学院が創立100周年を迎えた記念に、小磯良平画伯に描いていただいた、若き日のタルカット先生の青雲の志を今に伝える肖像画があります。完成後、画伯よりご寄贈いただいた

たこの絵は、30年の時を経て、色によってはかなり退色が進むなどの劣化が進んでいました。建学の精神と小磯画伯のご好意を覚え、学院にとって大切な宝である作品の保存と公開を実現するために、2008年にレプリカが作成されています。左がオリジナル、右がレプリカです。

創立者の没後100年を記念する行事が行えるということは、その撒かれた種が芽を吹き、枝を張って育ち、今も存在しているということの証なのではないかと思います。そして、今ここに在る私たちには、それをさらに育てて次の世紀に伝えて行くという役目が与えられているのだと感じています。ありがとうございました。

(注1) "Only thirty-seven years have passed, yet they have bro't wonderful changes in many lines, but none more striking than the change in the ideals of woman's education and social position, a change which has no doubt, come largely thru Christian girls' schools." Mission News, Vol. 13, no. 5, 1910.

(注2) Talcott Memorial Section の訳語に当時は「タルカット記念文庫」をあてていた。

(注3) Miss Talcott's Testament

Received after her death by Susan A. Searle.

To be given eventually to the Talcott Memorial Section of

Kobe Jogakuin Library. 1911

(注4) Barrows, Martha J., "She might well have said with Dr. Davis: "My life is my

message." Mission News, Vol. 15, no. 3, 1911.

(注5) ELIZA TALCOTT

MAY 22 1836 - NOV. 1 1911

THIRTY EIGHT YEARS A MISSIONARY IN JAPAN

WELL DONE GOOD AND FAITHFUL SERVANT

ENTER THOU INTO THE JOY OF THY LORD

<史料室から>

タルカット先生召天 100 年を覚えて

佐伯 裕加恵 史料室職員



2011年11月1日、創立者の一人で初代校長であった Miss Eliza Talcott が亡くなって100年となる日を迎えました。神戸女学院ではこのことを覚えて、図書館本館閲覧室で展示「創立者 イライザ・タルカット―召天100年を記念して―」を2012年1月27日まで開催しています。

11月4日には学長・飯 謙先生による記念講演会も持たれました。創立者の精神と志がいに形成されたのか、そしてこの学校にその思いがどのようにつながり、今に至る学風や学校の精神の基となっているのかを再確認することができました。

タルカット先生は1875年10月12日に神戸女学院の元となる女子のための寄宿学校を神戸に創立しましたが、5年ほどで学校を離れて市井の伝道に専念し、生涯を日本での伝道に捧げました。そのため、学校の教師としてだけではなく、宣教師として多くの人々に影響を与えました。

神戸女学院には、第5代院長であった Miss Charlotte Burgis DeForest によって収集されたタルカット先生の史料集が残されています。ELIZA TALCOTT, FOUNDER OF KOBE COLLEGE, 1919. と題された青い表紙の冊子です（貴重書になっているので、普段見ることはできません）。

近年、どこの大学でも、大学の個性を明確にするため、スクール・アイデンティティを創業者や建学の精神に求めるようになってきました。しかし神戸女学院では1919年に、既に創業者を覚えて、史料の収集がされていたのです。タルカット先生が亡くなったのは1911年のことですから、わずか8年後のことです。デフォレスト先生はルーツを探って、アメリカにも問い合わせをされたそうですが、もうこの時点で、タルカット先生の故郷には先生のことを知る人はいなかったということです。史料を残すこと、探すことの難しさを物語っているエピソードといえます。

この史料集の中には26点の史料が納められています（史料の内容については、神戸女学院史料室機関誌『学院史料』1896年発行第4号所載の「デフォレスト先生と史料集」をご参照ください）が、今回は、この史料集にも収められている同窓会誌（現・広報誌）『めぐみ』の中から、タルカット先生の人となりをご紹介しますと思います。

明治45年1月発行『めぐみ』第53号所載「タルカット女史履歴」（pp.31-33）より（旧漢字は現代漢字に改めています）

〔前略〕当時我国の旧習未だ脱せず。基督教未だ公認されずして、事業頗る困難なりしかど女史少しも屈せず、堅忍忠信以て事に当る。為に堅信なる婦人信徒の陸續として輩出するもの少からず。神戸教会の創立さるゝや、女史衆人の背後に隠れて能く勤む。聞く当時教会の旺盛なる元氣は健気なる婦人たちによりて支持せられたりと。而して隠然この婦人たちを鼓舞したりし者は蓋し堅信の精神横溢せりしミスタルカットにてありしと、〔略〕一度彼女の熱愛に触れたるものは終生忘るゝ事能はず。貧者に対しては常に陰徳を行ひて惜しむところなく施して顧る所なく、自ら平然として知らざるものゝ如し。恩顧に反くものあるも敢て怒る事をせず、謙て之を導くの一途あるのみ。〔略〕彼女は全く基督の聖愛を体現したるものといふべきなり。遠方の人には書類を送り彼女は求道者の家を探し近隣の人に問い尋ぬるとき、又其人に向つて道を語り。〔略〕抑も彼女の他に及ぼせる感化は皆個人的関係の故をもつて宗教の真味を伝へしものなれば其の印象の深刻なるや人をして永く忘るゝ能はざらしめたり。斯くて彼女は全く己を忘れ、心は神に身は人に捧げて働きたるなり。〔後略〕

現在開催中のタルカット展では、普段目にするのでできないタルカット先生にまつわ

る物も展示されています。展示品を通して、創立者の息吹を感じていただければ幸いです。

なお、図書館本館 1 階西側の史料室閲覧室でも関連展示「アメリカンボードと日本伝道」を行なっています。タルカット先生を日本に派遣したアメリカの海外宣教団体アメリカンボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）を紹介するものです。合わせてご覧いただくと、より宣教師のこと、学校のことを理解していただけるのではないかと思います。

<神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談 IX>

神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談 IX—クラブ・ド・ロネトンム版『バルザック全集』全28巻（1955年）について—（その3）

柏木 隆雄 大手前大学副学長（元神戸女学院大学総合文化学科助教授）

1. ミシェル・レヴィー版『バルザック全集』全24巻（1869—1876）補筆

雑談の第Ⅷ回、最後に、「20世紀に入ってからの画期的なバルザック全集はいわゆるコナール版の全40巻の全集だが、これは肝心のオネトンム版全集の話とともに次回に述べることにしよう」と書いて終わったが、実は今年の4月から私は勤め先が変わり、そのためあたふたと日を送ることになって、上のように約束したこの連載も、前回は休ませてもらうことになった。申し訳ないと思いながら、あっという間に日が経って、クリスマスももう間近。つくづく時の経つのは早い、それも加齢とともに、まったく早いと実感する。表題の話に辿りつくまでに寄り道をして、下手の長談義はいつ果てるかもしれないこの連載、もう少しラチもない話につきあっていただきたい。というのも、この話はバルザックの全集談義と関係がないわけではなく、また先回の文章で最後に取り上げたミシェル・レヴィー版『バルザック全集』全24巻とも深い関係があるからだ。

先にも書いたように、バルザックの死後の全集での集大成としてのミシェル・レヴィー版『バルザック全集』全24巻はミシェルとカルマンのレヴィ兄弟によって発刊されたもので、「バルザックのミシェル・レヴィ版の全集は8折大判で、私が初めてパリのバルザック博物館の図書室に入った時、すぐ目につくところに立派な赤と金の革装丁で堂々と並べられていて感動したものだ。組版も鮮明で読みやすく、このエディションは当時において一種の定本としての評価をえることになる。」と先のヴェリタス46号に書いた。これは私

のはるかな記憶から取り出して書いたのだけれど、もう一度バルザック博物館で確認したいと思っていた。それが今年の3月フランスに出かける機会があり、きわめてタイトな滞在だったけれど、思いがけない出会いがあり、その報告が今回中心となる。

2. 原発事故後のパリ

今回のパリ行は実にあわただしい日程で、3月18日に関空を発ち、23日にはパリを発って帰るという短かいものだった。ここ数年間パリにはご無沙汰していたので、久しぶりに友人たちにも会いたいし、とりわけ神戸女学院大学の助教授在任中の1981年から82年、留学の機会を与えられてパリ第7大学で博士論文を書いている時、フランス語の文章を見てもらった人が重い病気に罹っていることを共通の友人から知らされ、私たちの来仏を楽しみにしていると聞いて、ぜひお見舞いに行かなくてはと、時間をやりくりして計画したのだった。

思わぬ3月11日の東北大震災、津波と原発事故の3つの災難が重なった折に、呑気なパリ行きもないとも思ったが、それだけでなくも窮屈なスケジュールをやり繰りしての旅ということもあり、複雑な気持ちで関西空港に向うことにしたが、空港はフランス人でごった返していた。普通の便では足らなくて、チャーター便も用意されるという騒ぎ。彼らのほとんどは羽田空港からやってきた人たちだ。フランス政府が関東在住のフランス留学生や政府の職員などを急遽母国に召喚することにしたという。それだけ福島原発事故の脅威をフランス政府は情報を得て最速に対策を練ったものと思われる。全国の大学ではフランス人留学生をはじめ多くの外国人留学生が原発事故を理由に故国に帰り、そのまま帰って来ない状況も出るようになった。外国人にとって、関西も関東も同じであり、極東の小さい三日月みたいな日本が、すべて放射能に汚染されると思いこんでしまうのも無理はない。

ド・ゴール空港についてパリ行きのリムジンに乗ったものの、金曜日の夕方ということで市内までの高速は2時間以上の渋滞。パリで会社社長の定年後、手作り豆腐を始めた友人が、その夜一緒に夕食をしようと自慢の豆腐を作って楽しみに待っていてくれていると、やきもきしながらやっとホテルに到着したのは夜の9時を過ぎていた。友人の家は車で1時間以上もある。今夜は無理と思うと電話すると、タクシーでくれば何とかなるよ、待っているからと言われてタクシーを呼んだがなかなか来ない。やっと乗りこんで郊外の彼の家に向かったが、これまた渋滞。彼の家に到着したのはなんと午前12時に近い時刻だった。それでも準備に余念なく、おなかをすかして待っていてくれた友人夫婦を思えば、20時

間の不眠は理由にならない。ワインと湯豆腐、彼手さばきの刺身などを賞味して、再びパリのホテルにタクシーで戻ったのは現地時間午前三時。くたくただった。翌朝テレビを見たら真っ先に福島原発の日本では知らされなかった映像や恐ろしげなデータが映されていた。

長々神戸女学院図書館架蔵フランス語書目とは関係のない話題を連ねたのは、多少とも3月の事故に付随する記憶を留めておきたいと思ったことと、こうした幸先良くない出来事のアトに、思いがけない出会いがあったことを強調したためだ。

3. サロン・デュ・リーヴル（パリの書籍フェスティバル）

到着の翌日は土曜日。その日は家内がニースの図書館に勤める知人とパリで会う約束をしており、私も同道することになった。待ち合わせはパリの南の端にあるポルト・ド・ヴェルサイユ。折しもサロン・デュ・リーヴルが開催されているので、そこで会おうというのだ。「サロン・デュ・リーヴル」は全国の出版社がそれぞれの出版物を展示するフェスティバルで、著名な作家や詩人、研究者などが講演をしたり、対談したりする。3日間の開催期間に大勢の人が訪れる。単にパリジャンだけでなく、全国から本好きが集まって、待ち合わせの会場入り口は長蛇の列。知人をちゃんと見つけられるかどうか危ぶむほどだ。

入場は有料で、沢山の親子連れが並んでいたが、教職にある人や出版関係の人間は無料で、彼ら用の別の入り口がある。私たちは教員である証明書を作っていたので、入場券を買う手間と時間が省けて中に入れた。こうした教員優遇は、教育に関してフランスが高い意義を見出していることにある。大抵の公共の美術館、博物館は教員は無料で入れる。日本でもこういう催しはあるが、これほどの熱気と押すな押すなの人出となるだろうか。

知人と無事会えたが、彼女もまず展示めぐりを終えてからカフェで話をしようという。私もそれは好都合なので、とにかく関心のある書店の展示を見て回ることにした。そこでまず思いがけない発見があった。ガリマール社が展示している書籍に1930年から1950年代の出版物があり、それらはもちろん売り物だ。日本は再販制度があるために書籍は昔に出した本でも新刊書扱いで、印刷された定価に張り紙をしてあらたな定価が記される。それは一つに在庫商品に税金がかかるためだが、フランスでは書籍に関しては在庫品に税金をかけない。19世紀の文学に関する著名な研究書や詩人アルフレッド・ド・ヴィニーの「日記」が昔の値段のままで売られていた。それこそ1000円か2000円で買えるのだ。私は何冊も腕に抱えてレジに向かった。書店の人がいいのを見つけましたね、

と笑う。私はさらに掘り出し物はないかと展示棚の下に積んである書籍類をひっくり返したりしていたが、カフェに行く時間となり諦めた。

4. ブラッサンス広場の古本市

カフェでもやま話を3人でしている時、その日が土曜日で、しかもこのポルト・ド・ヴェルサイユの一つ先のバス停がブラッサンス広場であることに気がついた。パリの南の外れに近く、名歌手ジョルジュ・ブラッサンスの名を取った広場があり、毎土、日曜日、古本市が開かれることは連載の中に何度も書いた。すでに午後3時を回っている。急がねば。私が古本市に行く、と言うと、知人はまだ本を買うの？と呆れたが、彼女も一緒についてくることになった。

寒い日だった。しかし私はなんとなく興奮しているのであまり寒さは感じない。早く広場にいかないと、とバスの中でも焦っていた。寒さのせいか、あるいはサロン・デュ・リーヴルがあまりに沢山人がいたせいだろう。広場に着いてみると、さきほどの新刊書が色とりどりに鮮やかに山と積まれていたのは異なり、古びた雑誌の表紙が冷たい寒風に翻って、古本屋の親爺さんたちが背を丸めて、まばらな客と話したりしている。

古本屋の本を並べたテーブルの間を歩いていると、ふと赤黒い小型の本が20冊ほど並んでいるのが目に入った。(挿図写真1) 何となく閃くものがあった、一冊手にとってパラパラとめくると、なんと！それはミシェル・レヴィ版のバルザック全集だった。私は先にも書いたようにミシェル・レヴィ版は8折大判のものとはばかり思っていたから、ベルギーの偽版ではないかと一瞬疑ったが、出版年代は1876年。扉のロゴはまさしくM. Lとあって、ミシェル・レヴィの商標に間違いはない。恥ずかしいことに私はこうした小型の版で出ていたとは全く知らなかった。版はフロベールの『ボヴァリー夫人』の1856年初版とほとんど同じ体裁である。(挿図写真2)



挿図写真2

慌ててそこに並んでいる赤黒い本を一冊一冊中身を確認していった。全部で19冊ある。製本の間違いで本来の『人間喜劇』の順番に並んでおらず、最初に手に取った第一巻が「イヴの娘」から始まっているので、これは端本かと思わせたのだが、『私生活情景』から『分析的研究』まで、つまり『戯曲集』と『コント・ドロラティック（風流滑稽譚）』を除いて、『人間喜劇』の分はすべて揃っているものだった。

折しも本誌「ヴェリタス」にミシェル・レヴィ版バルザック全集の話を書いて間もなかったから、この偶然の出会いにいささか興奮した。さて値段は、と普通はそれが書かれている表紙の裏をめくったが、書かれていない。すると目ざとく私の目の色を見てとった中年のおばさんが近寄ってきて、「その本はいいよ、買うかい？」と声をかけた。私は「いや、ぱらぱらと見ているだけだけれど、これは幾らするの？」と聞くと、私はここの店じゃない。ここの店の親爺は今昼ご飯を食べに行っていて、まだ帰って来ない、と言う。値の交渉をしようと思っていたのがあてが外れ、それじゃ、また、と言ってその場を離れて、広い会場の反対側に並んでいる店を見に行った。そこで日本人と見るや是非これをと店主が差し出した1908年刊の徳富蘆花作『不如帰(ほととぎす)』の仏訳を、今時こんな本を読む日本人はいない、と言ってただ同然で買おうとしたけれど、相手は案外頑強で、結局2割ほど負けさせたくらいで買ったのを潮に、再びバルザックの本が並んでいる店に戻ると、親爺らしき男が、さきほどの女性と話している。

私の顔を見ると、女性が、ああ、昼飯から帰って来たよ、と言い、親爺にはすでに話していたらしく、彼は「これは上等だ。ちゃんと皆揃っている」と本を指さしながら声をかけた。私は「これは19冊しかない。全部揃っているわけがない」と答えると、いや、そんなことはない、これで全部だ、間違いはない、と頑張る。そこで「ほら、第一巻とあるけれど、これは『私生活情景』の最初の小説じゃない。これだけでも揃っていないのわかる。端本だよ。」と言うと、「そんなはずはないんだがなあ」と首をかしげ、「あんたはバルザックのことを良く知っているね。わしはバルザックの小説が大好きだ」と声を大きくした。その吐く息が酒臭い。おそらく昼飯に安葡萄酒を飲んだのだろう。で、値を聞くと120ユーロだ。19冊で120ユーロと言えば一冊600円から700円。文庫並みだ。一ケタ違う値段を予想をしていたけれど、そこで飛びついてはいけない。

「そりゃ、高い。まあ70ユーロというところだよ」と返事すると、「とんでもない、そんな値段じゃ売れない」と答える。それじゃ、やめようか、と思案顔をして、「それに明日日本に帰るから、これだけの本を持って帰れないし、日本に送ってくれるかい？」と聞くと「それゃ、送れないこともないが、・・・」「むずかしかりょうね、じゃ、どうするかなあ」とためらって、それから「で、70ユーロになる？」と言うと、「いやいや、とんでもない」と同じ返事。なんとも同じようなやり取りをしたあとで、親爺は、「じゃ、90ユーロにし

よう。」と折れた。私は80ユーロで折り合いをつけようと腹の中で思っていたけれど、これ以上粘るのは野暮（いや、この珍品をこれだけの安い値段で手に入れるのはまことに奇跡、天の配剤。神戸女学院図書館のお導き！と思っていた）。読者は私の心根の卑しさを思っ
て鬨蹙されるだろうけれど）と思い、じゃ、その値段で手を打とうと答えると、親爺は急にご機嫌になって、「いや、あんたはよくバルザックの本のことを知っているねえ、わしもバルザックの小説が好きなんだよ」と同じことを繰り返した。

本は帰りのトランクに入れて持って帰ることを家内に承知させて、ビニールの袋4つに詰め込んでもらうことにした。本をすっかり袋に入れ終わった親爺は、何か棚の下をごそごそさせていたが、やおら一冊の箱入りの本を取り出して、「この本はバルザック関係でも珍しいものだ。あんたにやるよ」と言って私に示す。それは戦前のバルザック研究の大御所マルセル・ブロンが編集していた「バルザック研究」誌の一冊だった。その『バルザック研究』誌は全部で12号ほど続いたもので、スラトキン社で戦後復刻刊行されて、私はその復刻版を持っている。彼がくれるというその本はこれまで見たことのない箱入りで、印刷もよく、バルザックの当時未完の手紙が収録されたものだった。値段は30ユーロと親爺さんの鉛筆で記してある。これはいらないから先程の90ユーロから30ユーロ引いてよ、と言いかけたが、さすがに日本人の評判を落とすことを恐れて、私は「これは珍しい、良い本だ。ありがとう！」と叫んで袋に押し込んだから、みなさんも安心してくださって良い。じっさいその本は珍しいものだった。親爺さんが気前良かったのはバルザック好きだったからか、昼ご飯に飲んだワインのせいだかはわからない。

さすがに4袋に詰められた19冊は重かったが、「わがものと思えば軽し傘の雪」、意気揚々と帰ったのは言うまでもない。しかし親爺が昼飯に行っていて、その場にいなかった時、例の古本屋の女性と交わした会話で、自分がこのブラッサンス広場の古本市に来るのはもう数十年前からで、と言いき、古本市を教えてくれた先号で紹介した「パラディオ」の親爺さんに教えてもらったのだ、その親爺さんを知っているか？と尋ねたら、彼女は親爺さんは知らないが、この市が始まったのは1994年からだと答えた。それはちょうど「パラディオ」の親爺さんが私に行けと勧めた年にあたる。つまり親爺さんは市が開催され始めた時点で紹介してくれたのである。そのことを聞いて私は胸が熱くなる思いがした。

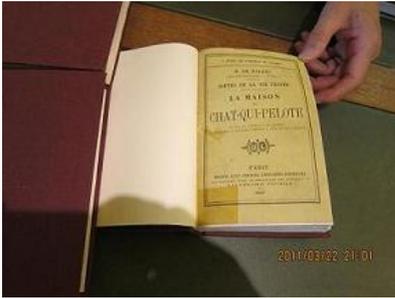
5. ふたたびバルザック博物館

自分では存在を知らなかったミシェル・レヴィ版の小型バルザック全集。これは偽版なのかどうか、どうしても確かめたくなくて、翌日バルザック博物館に行った。急いで出かけたのだが、日曜日は午前中休みで、午後から。仕方なく近くを歩いて、家内と二人レストランで早い昼飯を食べてから出かけた。数年のご無沙汰だったが、受付の女性に見覚えがある。それこそ1981年、神戸女学院大学から留学に来ていて、ほぼ半年毎日のように図書室に通っていた時代に図書室の番をしていた女性の一人だった。彼女は色黒ながらとても美人で慎ましやかで、親切な人だった。その人がその日もまたいた。私が「あなたはまだこちらに勤めていらっしゃるんですね？」と尋ねたら、「久しぶりですね、あなたのことはよく覚えています」と言う。そのおかげで怖い顔をした受付のおじさんが、無料で館内に通してくれた。(図書室は無料で入れるが、展示品のある館内は有料)



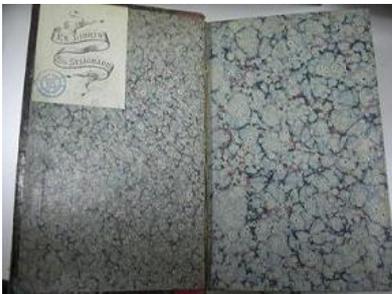
挿図写真3

図書室でミシェル・レヴィ版を調べる。先の連載で「立派な赤と金の革装丁で堂々と並べられていた感動した」ミシェル・レヴィ版『バルザック全集』全24巻(1869-1876)と書いたけれど、実際にはその本は黒い革装丁の本で、赤と金との革装丁の本は別のバルザック全集だった。人の記憶はあてにならぬものと分かる。(挿図写真3)



挿図写真4

この大きな版がミシェル・レヴィ版の最初の全集と思い込んでいたが、図書室には私が買ったのと同じ版の全集もあって、これは1856年から67年まで全55巻で刊行されたもので（挿図写真4）、つまりこの小型本が初版と言うべきものということが分かった。大きな版は豪華本仕立ての20巻だったのである。つまり私が前日値切って買い込んだのは初版の10年後の再版で、『人間喜劇』の全40巻を2巻、あるいは3巻を合冊して製本し19冊にしたものだったのだ。



挿図写真5

もともとフランスの本は仮綴じ本で販売され、それを製本するのは本を買った好事家が、自分の好みや財布に合わせて製本装丁する。私の買った本にはすべて購入者の（あるいは製本させた人の）Ex Libris 蔵書票が張ってある。（挿図写真5） Eugène Seligmann（ウジェーヌ・スリマンとでも発音するのだろうか？）という人がこの本の元の持ち主の一人となる。私もこうした蔵書票を作りたいとおもっているのだが、本に蔵書票を張るには少し本が多きに過ぎる。買った当座にまめに蔵書票を貼り付ける作業をしなければ、それとよほど趣味の良い蔵書票を作らなければ、かえって野暮になるだけと諦めている。

さて今回の連載、またまた横道に逸れて逸れっぱなしとなってしまった。しかし興味のある方には多少の同情を持って読んでいただけないか。次回には肝心の話に移るはずだが、来春2012年1月にニースに出かける。ニースの美術館の美本の『北斎漫画』が所蔵されており、それを家内と私の友人の日本近世文学の研究者夫婦と調査に赴く。ついでにその美術館で「ゾラと日本自然主義」という題で講演もすることになった。そのニースに近頃廃業した古本屋さんがある。先代はパリで古書店を開いていて、私の恩師の赤木昭三先生にカタログを貰って、以来何度か注文し、店がニースに移ってからもたびたび本を送ってもらった。バルザックの1955年の大衆版『全集』を破格の値段で買ったこともある。その親爺さんには30年以上の手紙のやり取りはあったものの一度も会ったことがない。こんどニースに行くのも、じつはその親爺さんと会えると思ったことが一番の動機だ。すでに連絡はしていて、ぜひその講演を聞きに行く。そのおり古書の話をつぶしりしようと言う返事も貰っている。

さて次回の内容もまた本題とは異なる古本談義になるのではないかと恐れている。なるべくオネトム版全集の話に埒をあげたいのだけれど。

〈お知らせ〉

図書館ニューズレター 『VERITAS』 リニューアルについて

図書館ニューズレター『VERITAS』は、1993年4月に図書館だより『VERITAS』を創刊。

1999年7号からは図書館ニューズレター『VERITAS』としてオンライン発行を始めました。

そして2011年12月、この48号から画面を一新いたします。

新しくなった『VERITAS』を今後ともどうぞよろしく願いいたします。

2011年もあとわずか。皆様、どうぞ良いクリスマス&新年をお迎え下さい。